

財団法人・釧新教育芸術振興基金が贈呈する平成五年度釧新郷土芸術賞の受賞者は、絵画(油絵)の木村利男さん、書道の伊東才良さん、能・宝生流の高橋義雄さんと高橋秀一さんに決まった。それぞれの分野で、郷土にしっかりと根をおろしながら研さんを積み重ね、質の高い発表活動を続けており、今後の活躍が期待される。受賞者の横顔とその活動を紹介します。

# 道東の風景に魅せられ

## 個展めざし大作に挑戦

### 絵画

木村利男さん(五七)

釧路市豊川町二の二



「道東の風景には尽きることのない魅力がある」と木村さん

道東の風土に取り組む姿勢は真しだ。愛車には常に画材を積み込んでおり、現場で制作する。「道東は題材に苦勞するところがない。ひとつの風景で

も四季によって、あるいは時間によって異なった表情を見せてくれる」郷土への愛着が、絵に注がれる情熱をいつも新鮮なものにしているのだらう。

平成元年のインド、ネパールへの取材旅行を境に作風に変化が出てきた。

「変わったとすれば、インドの色のためなのかも知れない。向こうは土が赤く、建物はピンクがかっている。その色彩の中で、人間味に触れることができた」

この取材旅行の成果が平成三年の第二回個展で発表された。絵に深みが出てきたという評価もあった。そういえば、風景の中に人物が登場するようになったのも、インド旅行からだ。

### 来年、四回目の個展を計画

昭和六十三年に初の個展を開いて以来、これまでに個展三回、来年は四回目の個展を計画している。

「道東の風景を中心に、大作にも取り組んでいきたいし、また作品に自分を出していきたい。個展もこれから続けていく。個展を周期

品の傾向といったものが出ている」静かな口調に意欲をにじませる。

雨竜郡朱鞠内町に生まれ

た。幼少時に来釧。昭和三十三年に釧路湖陵高校定時制を卒業、太平洋炭鉱勤務を経て昭和二十九年に釧路地方方法務局に入り、ここで司法書士の資格を得る。同

を再開した。

### 毎日、筆を手に

#### キャンバスへ

高校時代に故・小山田武さんから水彩画の指導を受け、基本のデッサンを仕込まれた。釧美展、さらに昭和三十年には道展にも初めて出品しているから画歴は

では会友に推挙されたが

司法書士事務所を開設して十年ほど中絶、再開して間もない昭和五十年ころに釧路美術協会会員になった。

「十年間のフランクのあと、感覚を取り戻すのに苦勞した。毎日、絵筆を手にしなければだめだ」と痛感した。今は、キャンバス

年正月一日から推挙された

出かけることも、年中行事となった。

今回の受賞の決定に「驚いています。これを励みとして、よい仕事をしていくようがんばる」と語っている。英子夫人との間に二男一女